

2 学期始業式

皆さんおはようございます。熱中症と新型コロナウイルス感染予防のため、2 学期始業式も放送で行います。1 学期の終業式で、「目標」「諦めない前向きな行動」、この2 点を伝えました。皆さん一人一人、自分の目標を持って今ここにいますか。

さて、今日は英語から入ります。皆さんは「That's a moonshot」という英語を知っていますか。どういう意味か分かりますか。ヒントは「moon」と「shot」です。「moon」は「月」、「shot」は「発射」、「moonshot」は、月へのロケット発射という意味です。これをヒントにして「That's a moonshot」という英語の意味を考えてみてください。1961年、アメリカのケネディ大統領は、「今後10年以内に人類を月に着陸させ、無事に帰還させる」という声明を出しました。いわゆる、アポロ計画です。この声明が出された当初、不可能に挑戦する馬鹿な奴だ、ということで、「That's a moonshot」と言われました。しかし、挑戦することに奮い立ち、情熱を掻き立てられるアメリカ国民の国民性を理解していたケネディ大統領は、「容易だからではなく、困難だからこそあえてやるのだ」と発言し、アメリカ国民の絶大な支持を得ました。そして、8年後の1969年に、アポロ11号による月面着陸を成功させました。

よく、「現状より10倍良くする方が、10%良くするよりも容易だ」と言われます。どういうことかと言うと、現状より10%だけ良くしようとすると、どうしても既存の概念ややり方にとらわれてしまい、良いものは産み出されません。それに対して、10倍良くしようとすると、新たな発想や創造力が必要となります。その結果、思いも寄らない良いものが産み出される、というのです。アポロ計画はまさにその産物だったのです。

「That's a moonshot」という英語は、最初は「また馬鹿なことをやっている」という意味で使われていましたが、アポロ11号による月面着陸を成功させてからは、「不可能だと思われても、夢に向かって努力すれば、それは叶うのだ」という意味で使われるようになりました。

10倍をめざす発想、ムーンショットの発想は、人類の歴史を大きく変えてきました。特に、テクノロジーの発達、発明には目を見張るものがあります。例えば、パソコンやスマホは、今から数十年前には到底考えられませんでした。まるで、ドラえもんの四次元ポケットから産み出された夢の道具のようです。ドラえもんが生まれたのは2112年です。100年先からタイムマシンに乗ってやってきましたが、今から100年先にどんなものが産み出されているか想像もつきません。しかし、一つだけ言えることは、これから先、何かが産み出されるとすれば、それを産み出すのは間違いなくムーンショットの発想です。そして、この発想がこれからの社会を大きく変えていくはずです。

実は、皆さんの先輩の中に、建学の精神「自彊不息」を深く胸に刻み、ムーンショットの発想で社会を大きく変えた偉大な先輩が多数おられます。その一人が、楽天グループ創業者で会長の三木谷浩史氏です。こうした偉大な先輩に続き、ここにいる明高生の中から、ムーンショットの発想で不可能を可能にし、これからの社会を大きく変えていく人が出てくれることを強く願っています。

2 学期が始まりました。目標の実現に向けて、真剣に、ひたむきに、一生懸命努力すればするほど、行き詰まってしまうものです。そんな時は、10%ではなく、10倍をめざす発想、ムーンショットの発想を持ってほしいと思います。きっと現状を打開するヒントが見つかるはずです。

今日は皆さんに、「That's a moonshot」という英語を伝え、いい意味で使える自分、いい意味で使われる自分づくりをめざし、今後、皆さんがさらに飛躍し成長してくれることを期待して式辞とします。